

雄勝稲作情報

No.2 令和7年4月8日



発行 ● こまち農業協同組合
 とうご農業協同組合
 湯沢主食集荷商業組合
 湯沢市農業総合指導センター
 東成瀬村農業総合指導センター
 秋田県農業共済組合
 監修 ● 雄勝地域振興局農林部農業振興普及課
 雄勝地方病害虫防除員協議会

今冬はまとまった降雪量があったものの、限られた用水を地域で有効活用し、適期作業(代かき、田植え、除草剤散布)に繋がるよう準備をしましょう！

育苗期のいもち病防除を徹底しましょう！

育苗期のいもち病の発生は、本田での早期・多発の原因になります。症状の特定が困難な場合もあるため、育苗期（ベンレート水和剤もしくはビームゾル）と本田（箱施用剤、側条施用剤）防除の両方実施でいもち病対策に万全を期しましょう。

育苗期防除剤と体系処理の例

☆本田への伝染・発病苗の持ち込みを防ぎます。必ず実施しましょう。

薬剤名	散布時期	箱当り使用量	備考
ベンレート水和剤	は種時～は種14日後まで	500倍液 500ml	かん注
	は種時～は種7日後頃	1,000倍液 1L	
ビームゾル	緑化始期	500倍液 500ml	かん注

いもち病と立枯病の育苗期防除例

は種時



ダコニール1000 + ベンレート水和剤

は種7日後頃



タチガレエースM液剤又は
ナエファインフロアブル

ダコニール1000 + タチガレエースM液剤又は
ナエファインフロアブル

ベンレート水和剤

ダコニール1000 + タチガレエースM液剤又は
ナエファインフロアブル

ビームゾル

- ※1 「ダコニール1000」「タチガレエースM液剤」「ナエファインフロアブル」については、苗立枯病対策となります。また、は種7日後頃のタチガレエースM液剤やナエファインフロアブルの使用については、ムレ苗防止となります。
- ※2 いもち病対策については「ベンレート水和剤」のは種時やは種7日後（1,000倍液 1L/箱）、は種14日後まで（500倍液 500ml/箱）の使用、または「ビームゾル」の緑化始期の使用となります。

箱施用剤による本田防除の例

育苗箱施用剤は、移植後、本田にて効果を発揮し始めます。

薬剤名	散布時期	使用量
ファーストオリゼパディート粒剤	床土混和又は、 は種時（覆土前）	50g/箱 ^{*3} (1kg/10a ^{*4})
ツインターボ箱粒剤08	床土混和又は、は種時 (覆土前)～移植当日	
ブーンパディート箱粒剤	は種時（覆土前） ～移植当日	移植当日の 【箱まきちゃん】 による散布の様子
レシードプラス箱粒剤	は種時（覆土前） ～移植当日	
Dr.オリゼパディート粒剤	緑化期～移植当日	
箱大臣粒剤	移植7日前～移植当日	
デジタルメガフレア箱粒剤	移植3日前～移植当日	

- ※3 高密度播種の箱当たり使用量については、箱数の削減により、面積当たりの薬量が減少して防除効果が不安定になる場合がありますので、各指導機関にお問い合わせください。
- ※4 箱施用剤の使用量については、基本的に50g/箱となります。高密度播種する場合については、1kg/10aとなるよう10aあたりの育苗箱数に応じて薬剤の使用量を50～100gの範囲で調整してください。極端に薬剤投入量を減らすと期待する効果が発揮されない場合があります。

水稻育苗後に野菜、花きを作付する場合の注意点

- 水稻育苗後に野菜などを作付けする場合は、農薬が土壌に浸透しないように、苗箱の下に水を通さない無孔シートを敷きましょう。
- 箱施用剤は、苗を育苗ハウスの外に出してから畦畔で散布するか、田植え同時散布機(箱まきちゃん等)で散布します。

地域で協力して苗の過不足を解消しましょう

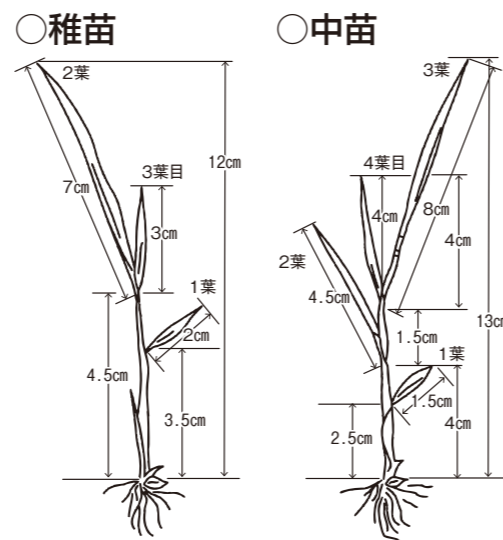
- 例年、育苗期の天候不順等が原因で、苗不足になる事例が散見されます。地域ごとの連絡体制を密にし、苗不足の農家がいた場合は融通しあって、苗の確保に努めましょう。

適正条件で種子予措(種子消毒・浸種・催芽)を実施

空散等によるいもち病適期防除

目標とする苗の姿

項目	稚苗	中苗
箱当りは種量	180g	100g
必要箱数	19箱/10a	27箱/10a
準備種子量	乾粳4kg	乾粳3kg
育苗日数	20日~25日	35日~40日
葉数	2.0~2.5葉	3.5~4.0葉
出芽長	1cm	0.5cm
移植	平均温度は13℃以上、60~70株/坪、1株植付け数4~5本で生育・収量の安定性が高い	平均温度は14℃以上、60~70株/坪、1株植付け数3~4本で生育・収量の安定性が高い



※初期分けつがとりにくい圃場では70株/坪を基準とする(中山間地等)

育苗の管理について

温度計を設置は、育苗箱の近くに設置しましょう！



適切な温度管理を！

こまめな温度管理に心がけ、低温や高温の急激な温度変化を避けましょう。

タップリかん水で、回数はできるだけ少なく！

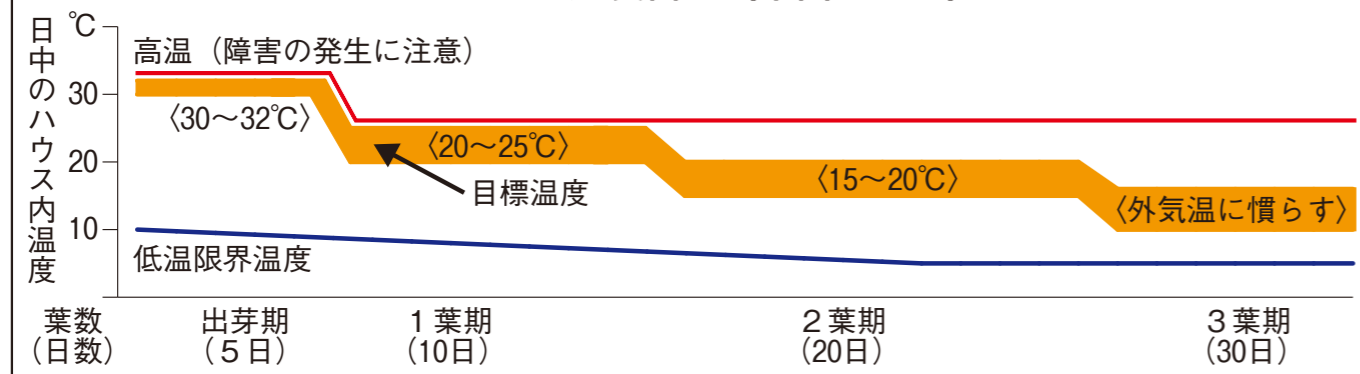
朝方に充分かん水し、回数をできるだけ少なくします。
夕方のかん水は、箱内温度を下げるので行わないようにします。

カビなどの発生に注意！

春先は、寒暖差が大きくなります。カビなどの病害は、ベタ張り期間に感染するものが多いので、特に、床土の過湿には注意しましょう。

被覆資材により温度変化が異なるため注意しましょう！

温度管理（中苗モデル）



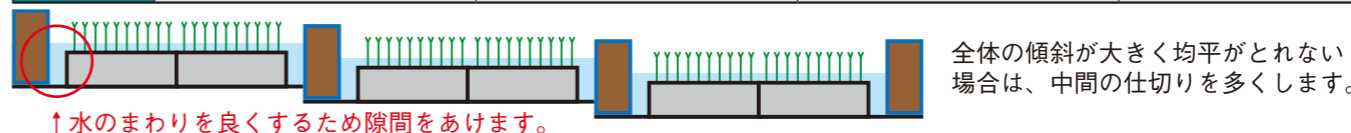
プール育苗の水管理、温度管理

〇プール育苗は、出芽から緑化までは通常の育苗管理を行い、緑化終了後から湛水します。湛水以降は、毎日のかん水やハウス開閉の手間が省けるので、育苗管理を大幅に省力化できます。

〇しっかりとした湛水管理により、カビや細菌による病害やムレ苗などが発生しにくくなることから、「農薬節減技術」としても推奨しています。

<時期別管理のポイント>

生育管理	は種～出芽揃い	緑化期	プール湛水期	田植え
被覆	●育苗期の利用【加湿出芽】 ○被覆資材の使用【無加湿出芽】	・光にならず ・4℃以下の時は保湿マットで被覆する	・湛水開始は、本葉1.0~1.5葉から(根が箱底に達成) ・ハウスは全開放	
温度	●加温出芽 30~32℃：一定 ○無加温出芽 15~30℃：変化	・温度の目安 日中：20~25℃ 最低：5℃	・温度の目安 日中：25℃ 最低：10℃ (水温も準ずる)	・田の地温と水温を高めておく
水	・は種時、床土に十分かん水する ・保湿を保つ	・床土や覆土がかなり乾燥した場合のみかん水	・常時湛水(水深) 通常時:箱上1~2cm 低温時:苗丈の半分	○保温的管理(深水管理)
注意点	・催芽はハト胸状態 ・床土のpH調整 pH:4.5~5.5 ・出芽長の目安 中苗:5mm以下 稚苗:10mm以下	・箱上からかん水はできるだけ控える ※どうしてもかん水が必要な場合は、ラブリシートを被覆したまま行う方法もある	・湛水は早朝に行う ・水温を常時観察する ・落水は田植え2~3日前とし、苗箱の軽量化を図る	



本田の準備について

- 〇雪解け後、速やかに田面の停滞水を排水し、土壌の乾燥を促進しましょう。
- 〇ネズミ穴などによる畦畔からの漏水を防止するため、積極的に畦塗りを行いましょう。
- 〇ロータリー耕うん作業は、根域確保のため、耕深15cmを目標に行いましょう。
- 〇代かき整地は、作土表面を均一にし、適度な透水となるよう、浅めに丁寧に行いましょう。
- 〇前年度にひこばえが多かった圃場では、ガス湧きが起こりやすくなっています。根痛みの原因にも繋がりますので、積極的に鉄を含む土壌改良資材を活用しましょう。

「もみ枯れ細菌病」や「ばか苗病」に注意

【もみ枯れ細菌病】… 第1または第2葉の基部の黄白化や地際部の褐変等

出芽温度は32℃を超えると多発しやすくなります。ただし、無加温出芽時で出芽までの温度を抑え出芽が揃わない場合でも被覆期間を過剰に長くすることで病害の発生を助長します。また、出芽後の再被覆を行った場合にも病害の発生を助長するため再被覆は行わないようにしましょう。

緑化期以降は25℃以下で過湿にならないように注意し、かん水は午前中に行いましょう。



【ばか苗病】

ばか苗病は、第2葉期頃から苗の徒長や黄化が見られ始めます。

採種ほ場周辺に、ほ場(田んぼ)をお持ちの方で、苗箱に「ばか苗病」が見られる場合は、JA等の関係機関までご連絡ください。

